

くうなん広報誌コネクト

# Connect

いただきます。



くうなん米プロジェクト  
—空知のお米をご本山へ—

お仏飯 感謝のこころを 供えます

食べるのは ほとけさまでは ありません

わたしがいただき 生かされる

わたしのいのちを つなぐもの

今日もまた 多くのご恩を いただきます



**お** 米の一大産地である空知。北海道の米の収穫量は60万トンのうち、空知の収穫量は25万トン、南空知だけでも約10万トンの収穫量を誇り、収穫量、品質ともに北海道No1の米どころとして生産量を支えています。

様々な品種が空知管内で栽培されている中、粘りや甘みのバランスが良いとされ、今や全国でも人気の「ななつぼし」や、おいしさとブランド力を保つため厳しい品質管理が定められている「ゆめぴりか」などが代表的です。

全国に北海道米が広がるきっかけともなったマツコ・デラックスさんがおいしそうに食べているCMも記憶に新しいのではないのでしょうか。



美味しいお米を西本願寺へお届けしようと思ったのが「くうなん米プロジェクト」です。

**私** たちのお寺では、仏さまに毎日お供えをする**仏飯**や法要の際に参拝者にお出しする**お齋**（法要や法事における会食）などで無くてはならない存在のお米。

浄土真宗本願寺派の本山である京都の西本願寺では、毎朝約6升もの米を**仏飯**として各所にお供えし、お昼に下げられた**仏飯**は原則として西本願寺職員が食べていますが、一部はお土産用のせんべいの原材料に使用されています。

その**仏飯**に使用するお米はご門徒の皆様や、各寺院、**仏飯講**と呼ばれる組織からの進納でまかなっていますが、年々進納される量が減少傾向にあり2007（平成19）年度には224件の進納だったのが、昨年2019（令和元）年度には115件と、約半数となってしまう、寺院や農家の減少や衰退など様々な理由による原因が考えられます。

そこで私たち【くうなん】も少しでも力になりたいと考え空知の

3

年前より始まったくうなん米プロジェクトは、ただお米を集めて西本願寺へ送るというだけではなく、ご門徒の農家の方たちのご協力とご指導をいただき、田んぼを一部使用させていただき、空知南組各寺院のご門徒や子ども会の子たち、岩見沢市内の児童養護施設の子どもたち、様々にお寺とご縁のある方たちと手作業での田植え・稲刈り体験の開催や、お米を通して「いのち」の尊さを知っていただく食育講座を行ってきました。

体験の際に収穫したお米や、プロジェクトに賛同してくれた農家の方からご提供いただいたお米を「くうなん米」と呼び、子供から大人までがお寺や仏教とつながるご縁を結んでいただきたいという願いも込められています。

「お米は「西本願寺」に進納するだけにとどまらず、特別養護老人ホームや、主にながを中心とした終末期医療の患者と向き合う緩和ケア施設を経営する「ビハーラ本願寺」への提供、西本願寺が推進する活動である【貧困の克服】に向けた子どもたちの支援である「子ども食堂」（京都市後援）へと提供するなど、幅広い活動へと発展しています。

昨年2019年は、お米1250キロ、協賛金26万円ものご協力をいただきました。今年は新型コロナウイルスの影響により、残念ながら田植えなどの体験は中止となってしまいましたが、引き続き本山への進納は継続したいと考えておりますのでお米の提供や、協賛金のご協力をよろしくお願いいたします。



表紙に使われた仏飯。西本願寺の親鸞聖人木像前に供えられる仏飯はこのインパクトある形なのだ。一般寺院でこの盛り方はなかなかお目にかかれないが、空知南組内寺院で特別な法要の際はこの盛り方を実践しているお寺があると聞き作っていただいた。

西本願寺では仏飯に使用する為毎日炊くお米は6升。わたしたちが進納させていただいた「くうなん米」もこの仏飯米として使用される。その中で一番大きな仏飯には約9合を使用し、高さは20センチ近くある。仏飯所に勤める方が毎朝3時から準備をする。基本的には素手で盛るが、さすがに9合サイズは素手では難しいので、円筒状の木枠を用いてしっかりと押し固め、その上にドーム状に盛り付ける。持ち運んでも崩れず、時間が経って乾いてもなお美しい形のままに盛るには細心の注意と熟練が必要だそうだ。

## くうなん米プロジェクト 協賛方法

◇お米（玄米） 30キロの進納  
※銘柄は問いません。

◇協賛金でのご協力  
※輸送料とお米の購入に  
充てさせていただきます。

◇日持ちする野菜  
（玉ねぎ・じゃがいも）の進納  
※主にビハーラ本願寺へ進納

## 進納方法

所属寺院へ11月15日までに  
お届けをお願いします。

# DHARMA

## いのちを知る

法話 名和康成



こ

の度、この広報誌の中で紹介されていた「くうなん米プロジェクト」。私も幾度か子どもを連れて参加したことがあります。「他のいのちに生かされて生きていること」は、教科書やインターネットで調べても、本当の意味で知ることができません。田んぼに足を踏み入れたときの泥のグニャツとしたあの感触や、ぴりりとくる雪解け水の冷たさ、そして腰を曲げつつ苗を植え進んでいくことが何と重労働であることか。機械化が進む昨今において、あえて手作業でそれらを行うことで、たくさんの方々のご苦労の上に、今のこの私が生かされているのだということを、まさに「肌で実感」できる貴重な場でありました。

「塩の辛さ、砂糖の甘さは学問では理解できない。だが、なめてみればすぐわかる」と、経験することの大切さを諭えたのは、かの松下幸之助さんであります。 「いのちを知る」ということについても、実体験に勝るものはないのでしょうか。生まれ、古い、死にゆくもの・・・それはいのちそのものが雄弁に語ってくるのです。

私は長男が生まれた日のことを今でもよく覚えています。腕の中にあるいのちは軽く、小さく、温かく、そして簡単にこわれそうで怖さも感じました。生まれてくるということはかくも不思議なことなのだと思感した瞬間でした。

昔はとても元気だった私の祖母。その祖母が歳を重ね、手をとり一緒に歩いたとき、その歩みのなんとたどたどしかったことか。亡くなった時のあの肌の冷たさは心にもまで響きました。寝ているような雰囲気の中にも二度と動くことがないその様子は「あんたもこうなるんだよ」と祖母が私に語りかけているようでした。

いのちと向き合うことは時に厳しさを伴いますが、そこに眼を向けることは、自分自身のいのちの姿を知ることにも繋がります。この世に生まれた以上、老、病、死から逃れられない我が身を知り、そこに届く阿弥陀さまのお慈悲のお心を聞かせていただく機縁とさせていただけたいものです。

十方の如来は衆生を 一子のごとく憐念す (『浄土和讃』註釈版聖典五七七頁)

阿弥陀さまは、生きとし生けるものそれぞれを、まるで「ひとりご」のごとく、かけがえのない大切な存在としてごらんになつています。自分を「かけがえのない大切なもの」と見つめてくれる方がいるということは、まことにありがたいことです。私たちは、阿弥陀さまの優しき慈しみのまなざしの中に、今ここにあるいのちが、いかに尊いものであるかということを知らされるのです。

凡夫である私は、自分の都合で「役に立つ」「役に立たない」「使える」「使えない」「必要」「無駄」という物差しでいのちをはかろうとします。そのような私が、いのちの尊さや、かけがえのなさを知るには、阿弥陀さまのお言葉に依るしかありません。自分自身のいのちに眼を向け、かけがえのなさをみ教えにたずね、あなたも私も如来さまから願われている尊いいのちを生きていると、お互い尊敬と思いやりの心をもちつつ生きていきたいものであります。



# いただきます。

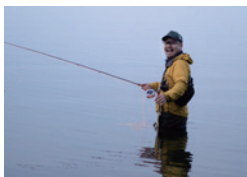
## 美

美 唄市農協に勤務しながら北海道猟友会美唄支部に所属し、美唄市の有害鳥獣駆除隊員として従事する山本峻也さんは、目の前にある食材がひとつのいのちであり、生きるうえで食べることはいのちをいただくと同様に理解しなければならぬと考え、4年前から狩猟を始めた。

「初めての獲物はエゾシカで、仕留めた後はうれしいという気持ちではなく、後悔の念が非常に強かったです。自分に出会わなければ寿命を全うできたかもしれないと、その夜は眠れず、生きることはいのちを奪うという大きな矛盾にたどりつきました。」そう話す山本さんの狩猟現場に同行させていただいた。

まだ真っ暗な日の出前に、最近買ったばかりだというトヨタのピックアップトラックに乗り込み、山奥へと向う、遠くに1頭のメスのエゾシカを発見した。東の空に太陽が昇り、時間がゆっくりと過ぎていくような感覚はつかの間。大きな銃声が白んだ空にこだました。火薬のにおいと、遠くから徐々に聞こえてくる藪がこすれる音を理解するまで少し時間がかかった。

血痕を追うと、シカが苦しそうに倒れていた。まだ生きている。山本さんは帽子を脱ぎ一礼しているのが印象的だった。その後、首にナイフを入れると、シカの目が真っ青な空に雨雲がかかっているように曇っていく。目の前でひとつのいのちが終わる瞬間だった。手際よく血抜きをし、シカの食肉加工施設へと運んだ。このシカも食肉として出荷されるそうだ。



山本峻也 1986年、美唄市生まれ。美唄市農協に勤務。週末は釣りやバイクを楽しむ。



「いただきますの言葉だけでは流れる血が見えず、いのちを感じる事ができないのです。普段は誰かが殺した動物の肉を平気で食べています。教育現場などでも死を伏せがちな現代ですが、今一度いのちをいただくことを考える機会になつてくれたら幸いです。」と、語ってくれた。

## 山

山 本さんの実家は美唄市内の真宗大谷派（お東）のお寺のご門徒であり、幼い頃はよく子ども会に参加していたそうだ。また、北海道猟友会美唄支部では正教寺（美唄市）にて年に一度、鳥獣追悼法要を行っており、お寺とご縁も結んでいる。

「狩猟をして最もよかったと思えるのが生死に向き合えることで、それが日常にあることです。動物がいのちを終える姿を目の当たりにし、なんとといっても私は新鮮な美味い肉を食べることができません。私たちが生き続けるということはいきものを殺し続けることです。」

あらためて私たちがいのちのつながりの中にあることを実感した。浄土真宗本願寺派の「食事の言葉」には、【多くのいのちと、みなさまのおかげにより、このごちそうをめぐまれました。深くご恩を喜び、ありがたくいただきます。】（食前の言葉）とある。食事には多くの尊いいのちをいただき、さらにその食事が私たちの食卓に届くまでには多くの方のご苦労があり、そのおかげで私たちは生かされているのだと仏様（阿弥陀様）は明らかにした。

「いただきます」という言葉をあまり耳にしなくなつた今だからこそ、その意味を問うべきではないだろうか。

# 空知南組 くうなん

砂川市

西願寺

歌志内市

廣大寺

上砂川町

證法寺

西法寺

奈井江町

西本寺

美唄市

法王寺

正教寺

蓮教寺

常光寺

三笠市

善行寺

真法寺

善照寺

岩見沢市

大安寺

願王寺

本向寺

隆王寺

静雲寺

光明寺

報恩寺

正滝寺

賢誠寺

南幌町

妙華寺

栗山町

唯専寺

教覚寺

由仁町

本覚寺

鶴林寺

長沼町

誓報寺

夕張市

萬行寺

永福寺

願正寺

照行寺

# Connect

[くうなん広報誌コネクト]  
vol.001 2020年8月発行

発行／空知南組  
編集／空知南組広報部

私たちは北海道南空知地区を

拠点として活動する

浄土真宗本願寺派寺院の団体

「空知南組」、通称「くうなん」です。

Connect (コネクト) という誌名は、

くうなんのスローガンである

「つたわれつながれ」が

由来となっています。

くうなん

検索

くうなん公式  
ホームページは  
こちら

